

# 鴻臚館

鴻臚館跡17

－平成16・17年度発掘調査概要報告書－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第968集

2007

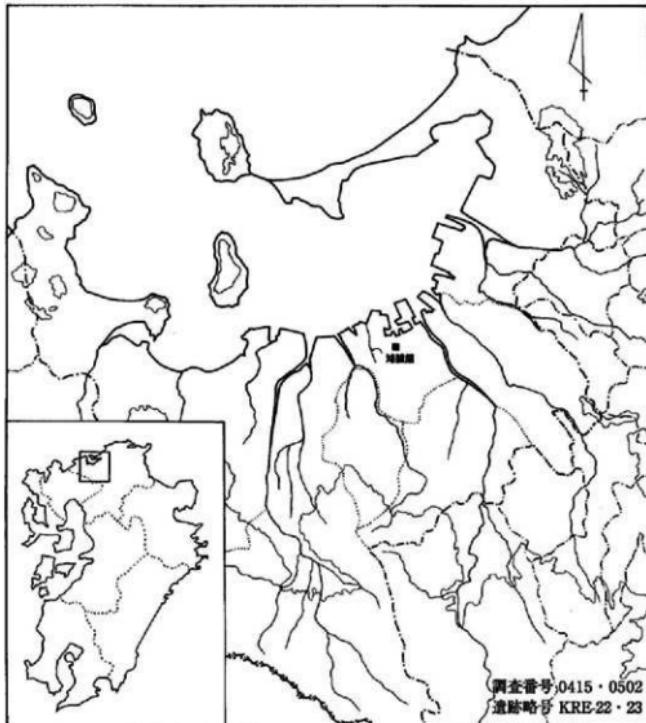
福岡市教育委員会

# 鴻臚館

## 鴻臚館跡17

- 平成16・17年度発掘調査概要報告書 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第968集



2007

福岡市教育委員会



1. 第IV期調査区モザイク写真（南上空より）



2. Gr.5 石垣造構SX17703土層堆積状況（東より）



1. 越州窑系青瓷水注 (Fig.13-8)



2. 白磁碗墨書「李」 (Fig.15-1)



3. 鴻臚館式軒丸瓦 (Fig.14-3)



4. 鴻臚館式軒丸瓦 (Fig.14-1)



5. 單卉蓮華文軒丸瓦 (Fig.14-5)

# 序

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末の福岡市中央区の国史跡福岡城跡内にある平和台野球場外野席スタンド改修工事の際の発見を契機として、翌63年から本格的に開始いたしました。平成15年度には国史跡として指定の申請を行ない、平成16年9月30日付けの官報号外で告示されました。

本市では、鴻臚館跡の全容解明を目的として、昭和63年度に鴻臚館跡調査研究指導委員会を設置し、その御指導の下で、発掘調査と関連資料の収集等を継続して推進しております。

鴻臚館発掘のきっかけとなりました平和台野球場は、平成10年度に解体撤去工事が行われました。そして、平成11年度からいよいよ平和台野球場跡地の本格的な発掘調査に着手いたしました。

平和台野球場跡地の発掘調査は、その面積が大きいこと、また舞鶴公園を利用する市民の利便性から南半分と北半分とに分け、それぞれ第Ⅳ期調査・第Ⅴ期調査として順次調査することにいたしました。

平成11年度から開始いたしました第Ⅳ期調査では、鴻臚館客館の施設が間に堀をはさんで南北に並立していたこと、南北の施設が基本的に相似形であったこと、そして東に門を設けていたことなどが明らかとなりました。また、北館から古墳を破壊した痕跡や谷を埋め立てて築いた石垣造構が出土するに及んで、鴻臚館の造営にあたっては地形変更を伴う大規模な造成工事を行っていた事実が推定できるようになってまいりました。

本書は、平成16年度と17年度に実施しました発掘調査成果を内容とする報告書であり、第Ⅳ期調査の報告としては最後の報告書になります。つきましては、本書が鴻臚館跡をはじめ本市の埋蔵文化財に対する、市民の皆様のご理解とご認識の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、ご理解とご協力をいただいた財務省福岡財務支局、福岡市都市整備局、また、温かくご指導いただいた鴻臚館跡調査研究指導委員会の各先生方、文化庁の皆様方には深甚なる謝意を表します。

平成19年3月30日

福岡市教育委員会  
教育長 植木 とみ子

## 例　言

- 本書は、平成16・17年度に実施した鴻臚館跡第22・23次調査について、その概要を報告するものである。
- 本書の編集・執筆は、大庭康時が担当した。
- 鴻臚館跡の発掘調査においては、平面直角座標系第2座標系に則って測量を行なっており、本書に使用した方位もこれによる。真北方位より、 $0^{\circ} 19'$  西偏する。
- 遺構番号・名称については、調査年度を著す“16”・“17”に続けて3桁の通し番号とした。遺構の性格を示す英文字の略号は次の通りである。  
塀・橋列：SA、建物：SB、池：SG、土坑：SK、柱穴：SP、性格不明の遺構：SX
- 本調査に関わる遺構実測図は大庭康時が、遺物実測は大庭・井上涼子（整理調査員）がおこなった。また、実測図の添書には、井上・大庭があたった。
- 平成16・17年度の調査は、以下の方々の参加で実施した。記して感謝の意を表します。  
【発掘作業】 降矢哲男（調査員）、栗田基、伊藤美知子、牛尾成正、大橋善平、尾崎裕光、  
嘉藤栄志、鎌ヶ江正良、斎藤善弘、坂本ハツ子、島津明男、杉村文子、鈴木敏男、  
高田甚一郎、谷吉美、塚原義一郎、堤篤史、土斐崎初栄、永井鈴子、仲野正徳、  
原幸子、古山昭、吉岡貝代、豊坂レイコ  
【整理作業】 整理調査員 赤坂有美、井上涼子、諫洪、宮園登美枝  
整理作業員 金石邦子、木下華代、富永静子、堀一恵

## 目　次

第一章 序 説.....	1
1. 鴻臚館跡発掘調査の経過と調査計画.....	1
2. 鴻臚館の立地と概要.....	2
3. 平成16・17年度調査事業の概要.....	3
(1) 発掘調査の組織..... 3	(2) 調査事業の概要..... 3
第二章 平成16年度・17年度調査の記録.....	4
1. 調査区の設定.....	4
2. 平成16年度調査の概要.....	5
3. 平成17年度調査の概要.....	5
(1) 16年度調査下層遺構..... 5	(2) 北館南石垣の調査..... 8
(3) 中央谷調査区..... 10	(4) Gr.6の調査..... 12
(5) Gr.7の調査.....	13
4. その他の出土遺物.....	17
第三章 小結.....	17

# 第一章 序 説

## 1. 鴻臚館跡発掘調査の経過と調査計画

鴻臚館跡の発掘調査は、昭和62年末の平和台野球場外野席における関連遺構と遺物の発見を契機とする。昭和63年度には鴻臚館跡調査研究指導委員会が組織され、全容解明のための調査が始まった。

鴻臚館跡の発掘調査は、「鴻臚館跡調査中期計画」に添って実施されている。中期計画は、鴻臚館跡推定地が国史跡福岡城跡内に立地しているために、文化庁をはじめとする関係各機関と協議の上、「舞鶴城址将来構想」の下で進められている城内各施設の移転事業計画を参考にしながら策定したもので、平成5年度第2回指導委員会で了承を受けた。

第Ⅰ期調査は平和台野球場外周南側部分を対象に、昭和63年度～平成4年度にかけて実施した。この地区では、奈良時代から平安時代までの建物遺構群と中国産陶磁器をはじめとする大量の遺物が出土し、鴻臚館跡の可能性が高いことが確認された。

第Ⅱ期調査は、5年度と6年度に福岡城三の丸西郭にある「舞鶴公園西広場」を調査対象地として、福岡城跡西辺部における鴻臚館関連遺構と遺物の有無確認、および旧地形復元を目的に調査を実施した。その結果、福岡城西北城における築城当時の地業の状況と当時の海岸線の復元が可能となった。

第Ⅲ期調査は、第Ⅰ期調査区南側の福岡城土塁部分を対象に平成7～9年度に実施し、平成10年度には平和台野球場解体工事に伴う立会調査と解体後の試掘調査を実施した。

第Ⅳ期調査は、平和台球場跡地南半分を対象として平成11年度から17年度にかけて実施した。平成18年度からは、平和台球場跡地北半分を対象とした第Ⅴ期調査に着手している。

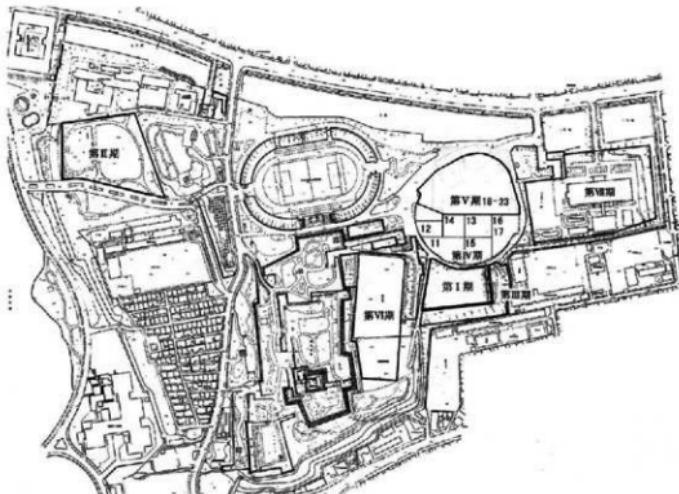


Fig. 1 鴻臚館跡発掘調査基本計画図（平成18年3月31日現在）

## 2. 鴻臚館跡の立地と概要

鴻臚館跡は、博多湾のほぼ中央部の海岸際に位置する。博多湾は、糸島半島と海の中道によって巾着状の内水域を形成する。鴻臚館は、そのほぼ中央、南から伸びてきて博多湾に突き出た丘陵状に築かれた。

663年、朝鮮半島の百濟を救援した倭の大軍は、白村江の戦いで唐・新羅連合軍に大敗する。朝鮮半島での敗戦を受けた天智朝は、664年福岡平野の最奥部を水城で画し、665年大野城・基跡城の二城を築いた。そして、これらに守られた大野城の南麓に大宰府を造営した。『日本書紀』には、663年以降来日する新羅や唐の使節を筑紫で要応した記事が続くが、要応・滞在に充てられた施設の名称は記されておらず、鴻臚館の前身である筑紫館の初見は688年まで下る。鴻臚館という名称は、弘仁年間（810～824）に唐の外交を司る官署である「鴻臚寺」に倣って改称したものと考えられている。

鴻臚館は、平安京・難波・筑紫の三ヶ所に置かれた。筑紫の鴻臚館は大宰府の管理下に置かれ、来日する外国船の監視と検問、乗員・貨物の収容と要応を行った。また、警固所も併置され、博多湾の防衛機能も担っていた。実際のところ、その当初こそ鴻臚館は遣唐使・遣新羅使の宿泊施設、新羅から来日した使節の受け入れ施設として機能したが、9世紀には新羅商人、10世紀以後は呉越・北宋商人の交易施設と化していく。発掘調査の所見・文献史料から、終焉は11世紀半ばと考えられる。

本書では、紙数の関係から自然的立地・周辺の遺跡との関わりなど詳述できないので、より詳しくは「鴻臚館跡14」福岡市埋蔵文化財調査報告書第783集、2004年をご参照頂きたい。

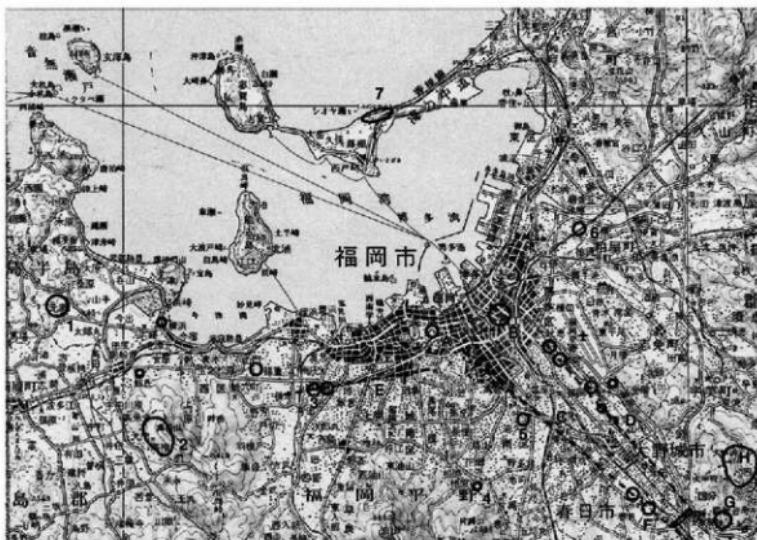


Fig. 2 周辺遺跡分布図 (1/200,000)

A.鴻臚館跡 B.博多港跡群 C・D・E.官窯 F.水城 G.大宰府衙跡 H.大野城跡  
1.元岡 2.稲佐道跡群 3.有田道跡群(平良路跡群)  
4.前原M道路跡(「跡長」里作) 5.三宅廟跡 6.多々良込田道跡 7.海の中道跡

### 3. 平成16・17年度調査事業の概要

#### (1) 発掘調査の組織

##### ①鴻臚館跡調査研究指導委員会（第9期）

委員長	福岡大学名誉教授	小田富士雄（考古学）
副委員長	東京大学教授	佐藤 信（国史学）
委員	元興寺文化財研究所所長	坪井清足（考古学）
	奈良文化財研究所所長	町田 章（考古学） - 16年度、田辺征夫（考古学） - 17年度
	川村学園女子大学教授	河原純之（考古学）
	元京都橘女子大学教授	佐賀女子短期大学教授 高島忠平（考古学）
	九州大学教授	狩野 久（国史学）
	奈良女子大学教授	山口大学名誉教授 八木 充（国史学）
	神戸芸術工科大学教授	元奈良国立文化財研究所所長 鈴木嘉吉（建築史学）
	元文化庁主任調査官	上野邦一（建築史学）
	元文化庁主任調査官	渡辺定夫（都市工学）
	元文化庁主任調査官	中村 一（造園学）
	元文化庁主任調査官	安原啓示（造園学）

##### ②発掘調査事業主体

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	植木とみ子
調査総括		文化財部長	山崎純男
庶務担当		文化財整備課長	平原 豪 - 16年度 櫻本芳治 - 17年度
		管理係長	市坪敏郎 - 16年度 栗須ひろ子 - 17年度
		管理係	鳥越由紀子
調査担当	文化財部課長（鴻臚館跡調査担当）	折尾 学 - 16年度	横山邦雄 - 17年度
	文化財部主査（鴻臚館跡調査担当）	大庭康時	

#### (2) 調査事業の概要

##### ①鴻臚館跡調査研究指導委員会

平成16年度の鴻臚館跡調査研究指導委員会は12月21日・22日、17年度指導委員会は11月18日・19日に、委員の諸先生方に文化庁調査官、福岡県教育庁、福岡市関連部局担当者を加え、開催した。

当該年度の調査成果報告、今後の発掘調査計画、整備計画などをご審議頂いた。また、16年度には福岡市西区元岡・桑原遺跡群第31次調査で発見された瓦窯、17年度には防人関連木簡が出土した佐賀県唐津市中原遺跡を鴻臚館関連遺跡として視察した。

##### ②発掘調査

平成16年度調査では、鴻臚館北館の東端を確認することを目的に、平成13年度調査区から15年度調査区の東側を対象に発掘調査を実施した。16年度調査では近世以降の調査・15年度調査区の追加調査のため鴻臚館時代の遺構調査にいたらず、17年度において16年度調査区の下層部分を調査した。

##### ③公開事業

当該年度の調査記録ビデオ撮影、公開用DVD制作、鴻臚館跡展示館常設展示パネルの新規作成を行った。17年度には現地説明会を実施、約200名の一般参加者を得た。

## 第二章 平成16年度・17年度調査の記録

### 1. 調査区の設定

平成16年度調査区は、平和台球場跡地南半分を対象として平成11年度から実施してきた第Ⅳ期調査の未掘部分を対象として設定した。すなわち、平成13年度調査区と15年度調査区の東隣接部分であり、鴻臚館北館の東側に当たる。

平成13年度調査では、8世紀前半に比定される第Ⅱ期区画の東門が検出された。また、舞鶴公園東側の福岡高等裁判所敷地の発掘調査では、裁判所と公園との間に谷が存在することが指摘されていた。これらの点から、平成16年度調査区は鴻臚館北館の東縁以外で谷に向かって下降することが予想され、北館東門にいたる導入部分の明解が発掘調査の目的となった。しかし、上層造構の調査・梵鐘鋳造造構の保存処置に伴う15年度調査区追加調査などのため、鴻臚館時代の造構調査にはいたらなかった。

平成17年度は、第Ⅳ期調査の最終年度に当たったため、16年度調査の継続(Gr.1~5)とともに、南

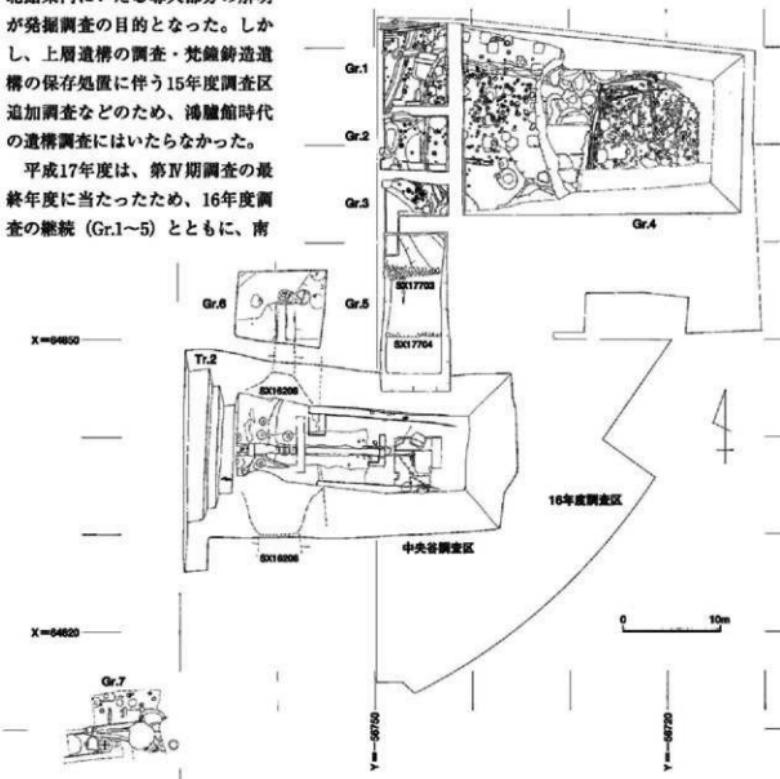


Fig. 3 平成16・17年度調査区全体図 (1/500)

館と北館をへだてる谷部分の追加調査（中央谷調査区）、北館と谷の関係を確認するための再調査区（Gr.6）、梵鐘鋳造遺構切り取り保存にともなう周辺の再調査（Gr.7）の四地点の調査を実施した。

## 2. 平成16年度調査の概要

第IV期調査の東端で、2110m<sup>2</sup>を発掘調査した（Fig.4・17）。平和台球場による擾乱や遺構面の削平が著しく、検出した遺構は小柱穴と溝状遺構に留まる。

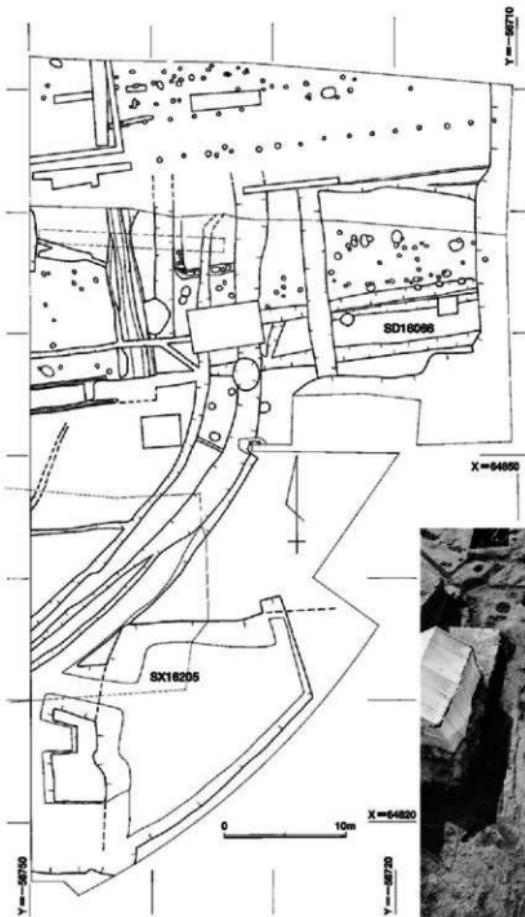


Fig. 4 平成16年度調査区全体図 (1/400)

## 3. 平成17年度調査の概要

(1) 16年度調査下層遺構  
北館東前面部分を対象に鴻臚館時代遺構の検出を目的とした調査を実施した。

遺構検出面は、基本的に茶褐色の粘質土で盛り土整地面である。西から東に大きく三段に下降する（Fig.5）。最



Ph. 1 SD16066全景（西より）

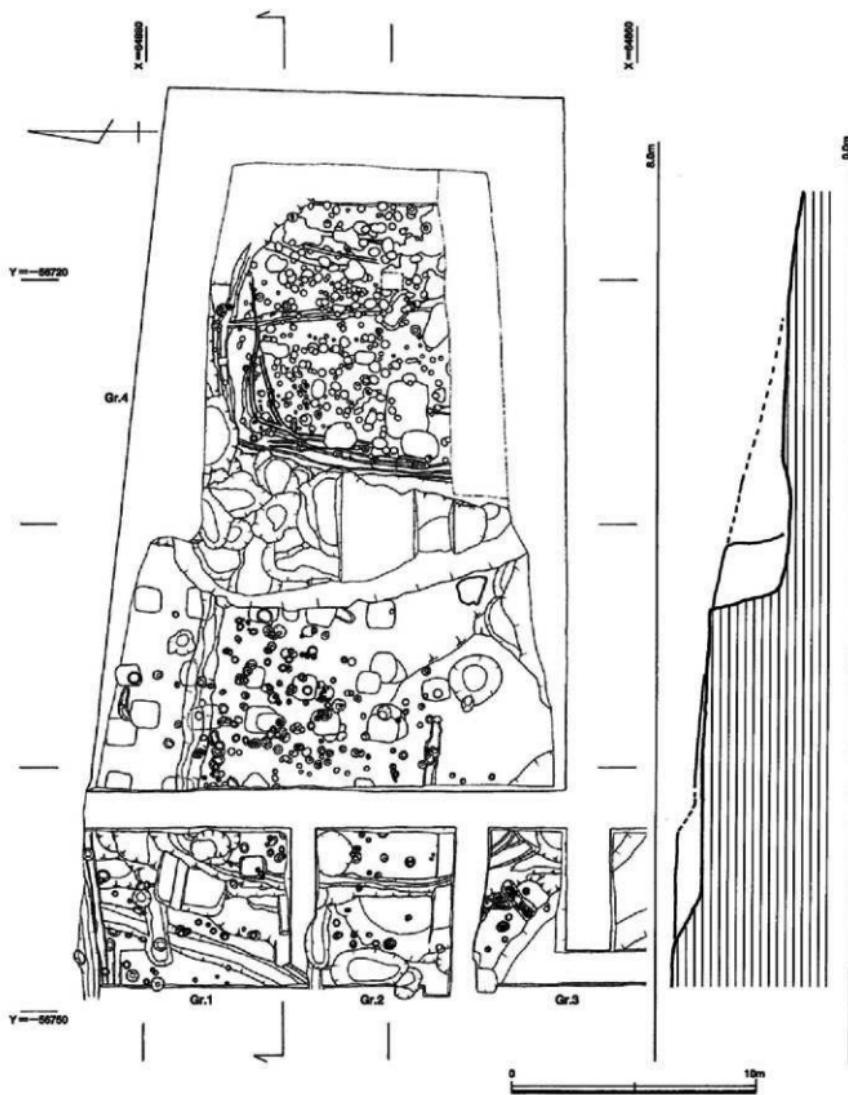


Fig. 5 Gr.1～Gr.4全体図 (1/200)

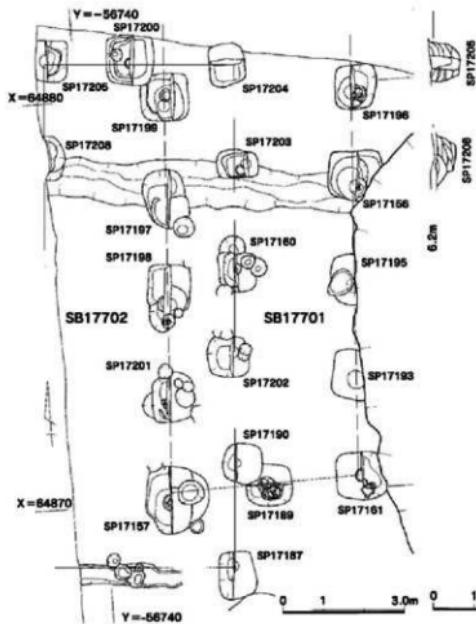


Fig. 6 SB17701・17702遺構平面図 (1/120)

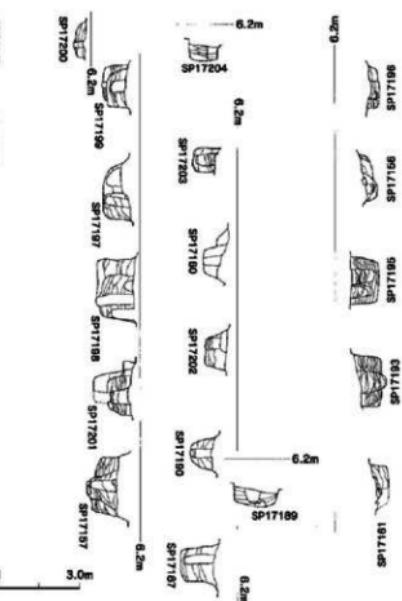


Fig. 7 SB17701・17702柱穴断面実測図 (1/120)

も西側は、13年度調査で鴻臚館第Ⅲ期(8世紀後半～9世紀前半)の礎石建物を検出した遺構面につながる。この段はGr.1～Gr.3の中程から1.2mほど下降する。現状では中世の土坑のため落ち廻が見にくいが、本来はGr.1の北端付近にみると、Y=-56745mあたりで段をなしたものと思われる。中段はGr.4のY=-56733mあたりまでわずかに傾斜しつつ下降し、約3mの落差で下段に落ちる。この段の中程以下は、地山が露出する。下段の段落ちの時期は不明であるが、後述する鴻臚館時代の据立柱建物が段落ちで切られていること、下段で



Ph. 2 SB17701・17702 (北より)

検出した遺構はすべて中世のものであることから、中世以後の掘削と思われる。

中段と下段には、調査区内でL字型に溝がめぐる。これらの溝は、出土遺物からおおむね16世紀代が比定でき、中世の屋敷が營まれたものと思われる。

Gr.4 北壁の観察では、盛り土整地面が東に向かってなだらかに下降する状況が看取できる。このことから、鴻臚館の時期には緩やかな傾斜面であったものと推定できる。

上段においては、遺構検出した粘質土面の10cm前後下から、二層の整地面が出土した。これは均質な砂質土を平坦に敷いたもので、この整地面に伴う遺構は皆無であった。13年度調査で第Ⅱ期の東門遺構を検出した遺構面につながるもので、東門の前面に奥行き20mほどの広場が設けられていたものと推定される。

中段においては、獨立柱建物を二棟検出した。柱穴の検出状況、13年度調査検出東門の中軸線との取り合いから、いずれも桁行五間、梁間二間の南北棟と考えられる(Fig.6)。柱穴の切り合い関係から、SB17702がSB17701に後出する。また、SB17701の柱穴断面から、少なくとも一回の建て直しはあるようで、同じ場所に建て替えられている(Fig.7)。時期を判断するのに十分な出土遺物はえられず、柱穴の規模・形状から鴻臚館時代であることは間違いないが、時期を限定できない。

## (2) 北館南石垣の調査

北館南側斜面の確認を目的としたGr.5において、北館の南斜面に築かれた石垣遺構(SX17703)を検出した。これは、14年度調査で検出した第Ⅱ期石垣(8世紀前半)の延長部に当たる。

Gr.5 西壁で最も遺存状態がよく、石積みの高さ約4m、下から1.4m付近で傾斜角を緩め、「く」字型に屈折する。玄武岩と麻岩を積み上げている。

14年度調査検出の石垣と異なる点としては、西壁から1m付近で石積みが変化していることに注目される(Ph.4)。すなわち、西側は玄武岩の板石を横方向に多用しつつ、密に石を積んでいるのに対し、東側では板石をほとんど用いず、石積みの隙間が大きい。また、西側と東側では基底部の高さにも明瞭な違いがある。一見して、東側の石積みが西側に付け足された継があるが、西側の石積



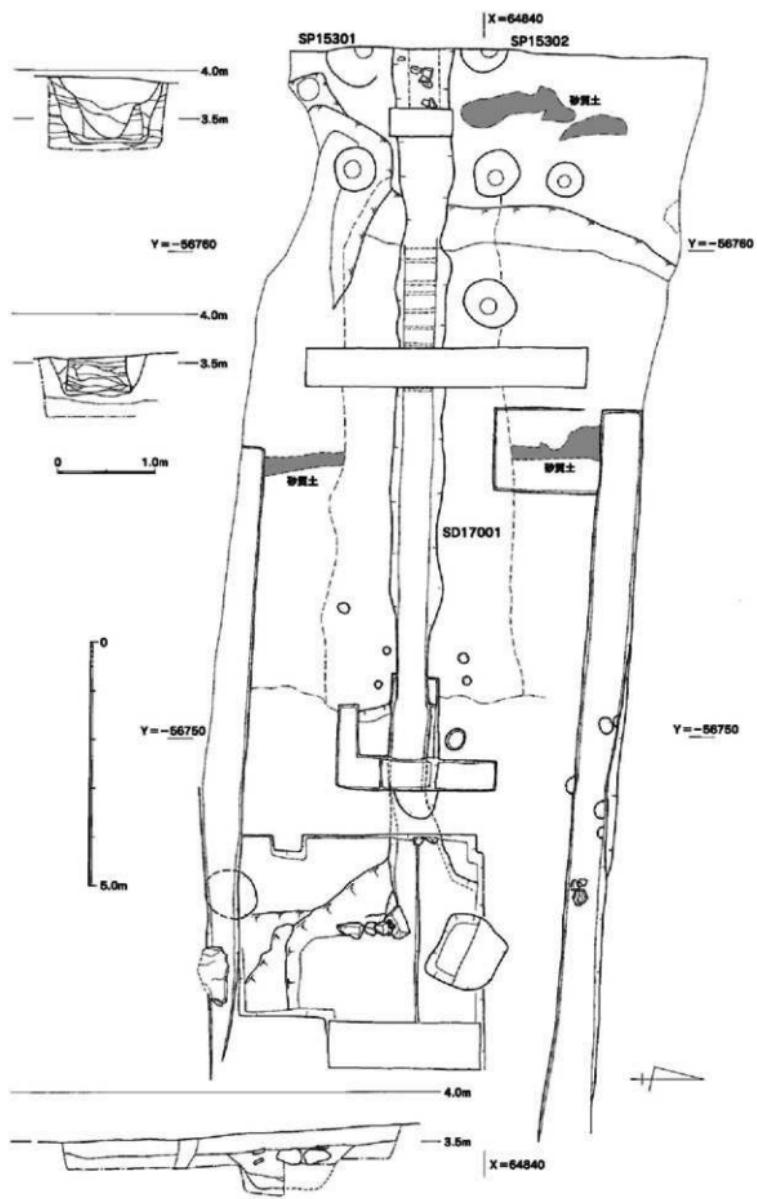
Ph.3 Gr.5全景（南より）



Ph.4 SX17703 (南東より)



Ph.5 SX17704 (南東より)



みに小口の処理はみられず、時間的なずれは考えにくい。今後の検討課題として結論は保留したい。

石垣の埋没後、灰色の砂質土を貼って、30度程度の勾配を持つ傾斜面が作られた。出土遺物から、9世紀代の整地斜面と考えられる。

また、石垣の前面に、石垣と平行して一段だけの石列が検出された（SX17704、Ph.5）。位置関係からは、前述した灰色砂質土斜面の裾付近に当たり、その土留めを担った石列と考えられる。ただし、土層の堆積状況から若干の疑問も残っており、可能性を指摘するにとどめたい。

### （3）中央谷調査区

平成15年度調査で03-3調査区2トレンチにおいて橋脚の柱穴を確認したことから、橋脚の規模を確認する目的で設定した調査区である。

柱穴掘り込み面の層位にあわせて2トレンチの東側を掘り下げたもので、谷底から木樋を埋置した溝状造構SD17001を検出した。木樋は、幅60cm、深さ30cmの三面側溝で、上部には30~40cm間隔で横木を渡している。トレンチ2から東に18m分を検出した。木質の遺存状態は悪く、樹種は不明。トレンチ2に近い部分では、上部を再掘削された形跡がある。開口部から西に4m付近は木樋を掘らず、素掘りの溝となる。開口部は「八」字状に開いた後「コ」字型に整える。また、溝の出口には、自然石



Ph. 6 SD17001 (東より)



Ph. 7 SD17001開口部 (北東より)

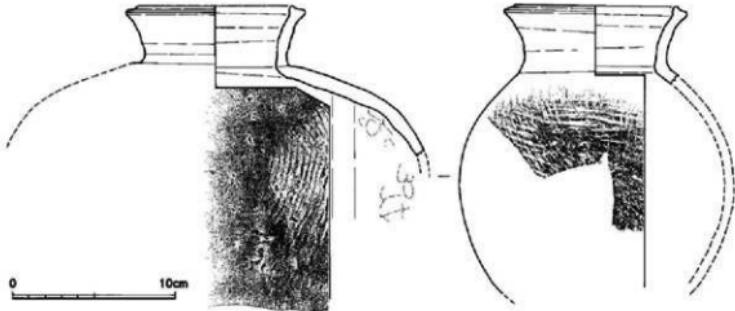


Fig. 9 SD17001出土遺物実測図 (1/3)

を直線状に並べている（Ph.7）。吐水口の補強であろう。Fig.9に、開口部から出土した須恵器の横板を図示する。木樋造構からの出土遺物は少なく時期を決定することは困難であるが、前述したGr.5検出石垣造構の年代観などと考え合わせると10世紀頃を想定するのが妥当であろう。

橋脚造構に面わると推定される柱穴は、2.5m間隔で5本を確認した。さらに13m離れた北側から1本の柱穴を検出したが、橋脚の構造を推定するにはいたらなかった。トレーナー2にかかったSP15301からは柱根巻きの粘土に封入された状態で、柱根が出土した。杉の丸柱で、直径約33cm、根から50cmほどが遺存していた。木柱は、根固めの礫の上に据えられていたが、礫は柱の中程から西側に集められていた。同様の状況は、柱痕跡が確認されたSP15302においても認められた。これは、



Ph.8 SP15302 (西より)



Ph.9 SP15301 (西より)



Ph.10 SP15301柱根遺存状況 (北西より)



Ph.11 SP15301根固め塊石 (西より)

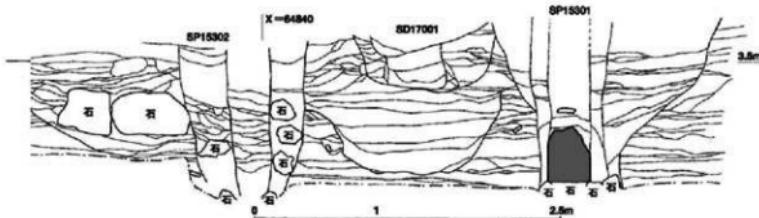


Fig.10 中央谷調査区Tr.2下部土層実測図 (1/40)

柱が西側に沈下して傾くのを避けるための処置と推定される。この想定が正しいとすれば、橋梁はSP15301とSP15302を結ぶ柱筋から東側に架けられていたと思われる。

また、架橋に先立って、土橋が存在したことが確認できた (SX16206, Fig.3)。これは、調査区の南壁と北壁に土層断面として表れたもので、横方向の細かい盛土の表面を砂質土で覆ったものである。砂質土は、調査区の遺構検出面においても平面的に認められるが、中央部では明らかに切れられており、土橋が開整された後に橋梁と木橋が掘り込まれたことがわかる。

トレンチ2の最下部では、平瓦と丸瓦を敷いた遺構が出土した (SX15303)。平瓦と丸瓦を伏せて敷き詰めるとともに、部分的に平瓦を立てたもので、性格は不明である。おおむね谷筋に添った方向に並ぶこと、土橋の基底部に当たることから、土橋に伴う暗渠の可能性が考えられる。瓦は、叩き目から推定して鴻臚館式と老司式が混在しており、8世紀前半に位置づけられる。

#### (4) Gr.6の調査

中央谷調査区で確認した土橋遺構SX16206の延長と、これまでに検出されている鴻臚館跡の遺構

との関連を確認するために、13年度調査区の中で実施した追加調査である (Ph.23)。土橋表面を覆う砂質土の延長が、13年度調査のSB1228-SP01の下に潜り込んでいくことを確認した。SB1228は、回廊状を呈する第III期の礎石建物であり、土橋が鴻臚館第III期（8世紀後半～9世紀前半）に先行することが明かとなった。



Ph.12 SX15303 (北東より)



Ph.13 SX15303 (東より)



Ph.14 石棺墓蓋石出土層断面 (南西より)



Ph.15 石棺墓蓋石出土状況 (北より)

(5) Gr. 7 の調査

15年度調査で出土した梵鐘铸造遺構SK15027の切取り保存処理に際して、その西側を主に周囲を大きく掘削する必要が生じた。そのため追加調査を実施した調査区である。

SK15027切り取り後の精査により、地表面を覆う旧表土層中から、石棺墓の蓋石が出士した(Ph.14)。

上面には、赤色顔料が一面に塗布されていた。

SD15269は、15年度遺構検出面の下層から出土した溝状遺構である。SK15027の壁面に断面が露出しており、SK15027に先行することは間違いない。埋土中より、連結したことを示す状態で66点の土鍾が出土した(Ph.18)。この他、円筒埴輪片・須恵器片などが出土しているが、時期を示す資料はえられなかった。

SK15122は、円筒形の土坑である。検出面での直径は約100cm、床面までの深さは270cmをはかる。便所遺構の可能性を考え、土壤の寄生虫分析を行

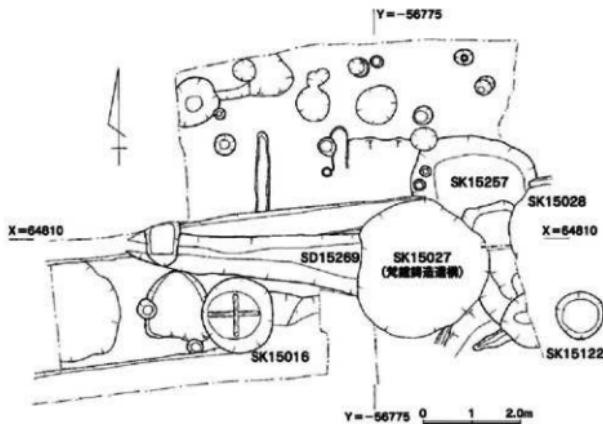


Fig.11 Gr. 7 遺構全体図 (1/100)



Ph16 SK15122 (南東より)



Ph17 SD15269 (北西より)



Ph18 SD15269土鍾出土状況 (北より)

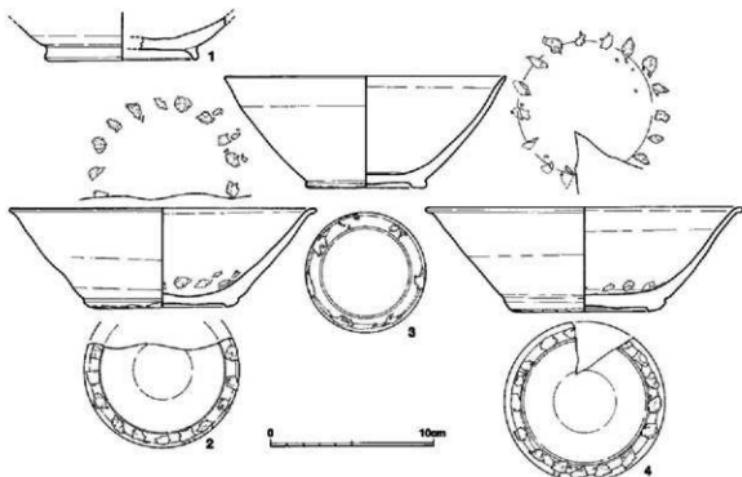
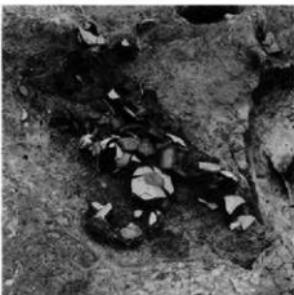


Fig.12 SK15122出土遺物実測図 (1/3)

ったが検出されず、草木類の花粉が極めて多いという分析結果をえた（古環境研究所、金原正子氏による）。しかし、壁が直に立った非常に深い土坑の形状は、これまでに調査した便所遺構（平成3年度調査SK57・69・70、15年度調査SK1124・1125）と共通したものであり、通常の廐棄土坑とは考えにくい。便所を汲み上げた上で再利用した可能性も留めたい。Fig.12に、出土遺物の一部を示す。1は、土器器碗である。表面は摩耗して、調整痕跡が残らない。2~4は、越州窯系青磁碗である。この他、須恵器などが出土している。時期は、9世紀前半に当たるのが妥当であろう。

SK15257は、SK15027に接して検出した廐棄土坑である。SK15027との切り合い部分は、陸軍24連隊の兵舎建物基礎の下になり、不明瞭だが、わずかに残った部分の観察では、SK15257の埋土がSK15027にかかるており、SK15257が後出するものと考えられる。Fig.13に出土遺物の一部を示す。1~3は、土器器の壊である。内外面ともに横撫で調整する。4~9・11は、越州窯系青磁である。4・5は、蓋である。内面は露胎となる。6・7は粗製の碗で、体部下位から外底部にかけては施釉しない。8は、水注である。ほぼ完形品が割れた状態で出土した。白化粧の上にオリーブ色の釉をかけ、口縁部と肩部4ヶ所に褐釉を加える。9・11は、壺である。11は、双耳壺であろう。10・12は無釉陶器である。10は水注で、きめ細かい胎土で精緻な作りである。12は、こね鉢である。胎土は粗い。内面は、使い込まれて滑らかになっている。Fig.14-4は、軒丸瓦の瓦当である。中心は半球状を呈し、その周囲に珠文、単弁の花文を配し、外区には珠文が並ぶ。須恵質に焼成されている。この他、白磁・須恵器・瓦などが出土している。遺構の時期としては、9世紀後半と考えられる。



Ph19 SK15257 (西より)

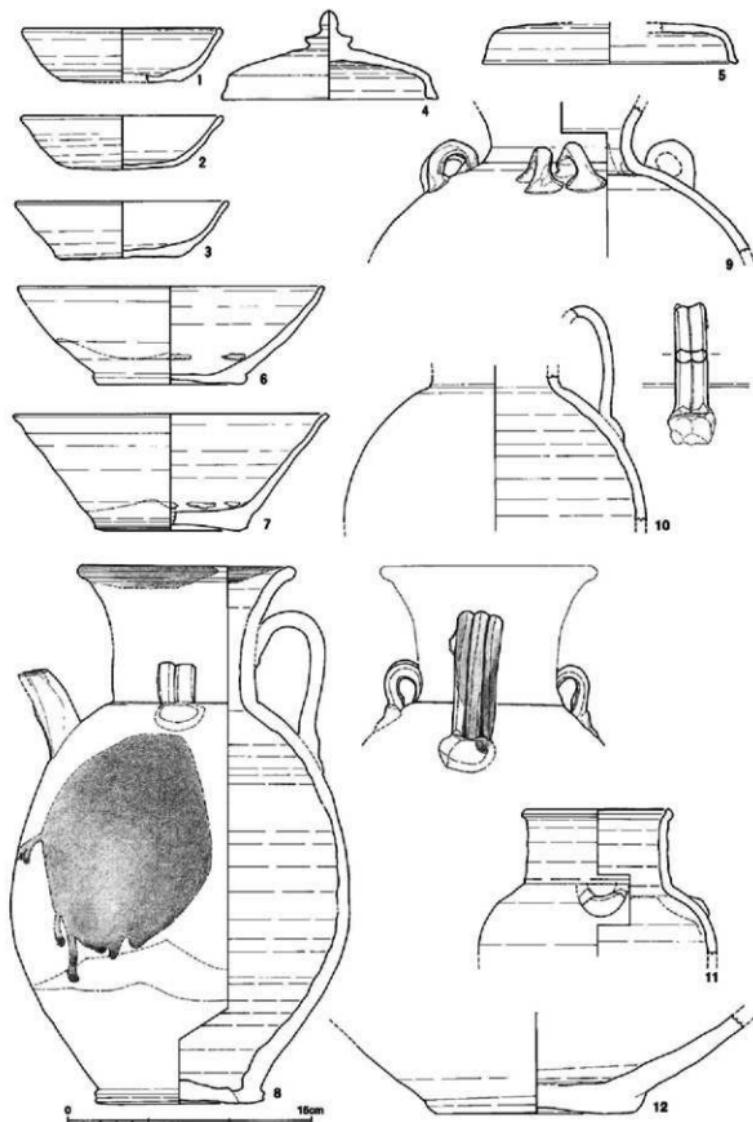


Fig.13 SK15257出土遺物実測図 (1/3)

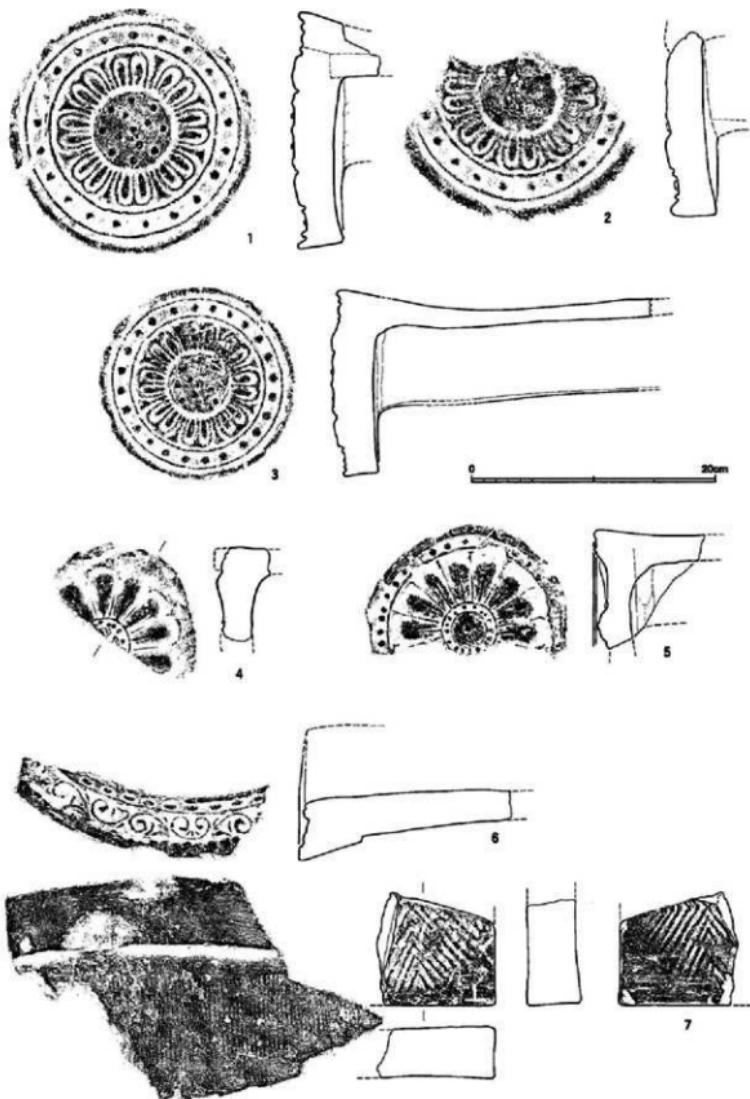


Fig.14 その他の出土遺物実測図 1 (1/4)

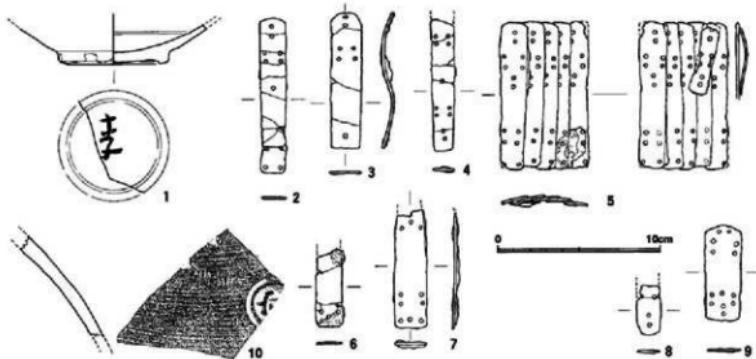


Fig.15 その他の出土遺物実測図 2 (1/3)

#### 4. その他の出土遺物

これまでの簡略な報告で漏れた遺構・遺物は大量であるが、最後に若干の遺物を紹介する。Fig.14には中央谷調査区トレント2から出土した瓦を示した(4を除く)。1~3は、鴻臚館式軒丸瓦である。1・2は面径20cmで、かなり大きめで作られている。3は直径約16cmであるが、鴻臚館ではむしろ標準的な大きさと言える。5は、単井蓮華文軒丸瓦である。6は鴻臚館式軒平瓦で、平瓦部分の下面には縦方向の平行叩き目が見られる。7は、瓦礫である。両面に絞杉文を型押しする。

Fig.15-1は、白磁碗である。高台の内側に「李」の墨書きを持つ。Gr.5包含層出土。2~9は、挂甲の鉄小札である。鋸が著しかったため、孔の位置は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、片多雅樹氏のご協力をえてX線撮影し、確認した。Gr.2、SX17025出土。

Fig.15-10は、15年度調査出土遺物であるが、報告書から漏れていたので、ここで紹介する。須恵器の壺の肩付近の破片である。外面に、二重丸にウ冠の漢字を配した刻印を打つ。

### 第三章 小結

平成16・17年度調査では、鴻臚館北館東側と、南館と北館の間を隔てる二カ所の谷の調査を行った。その結果、主に鴻臚館の景観復元に関わる成果を上げることができた。以下、簡単にまとめる。

#### (1) 鴻臚館北館東面の景観復元

北館の東側は谷に向かって緩く下降していた。谷側から北館に入館する流れを想定すると次のようになる。谷底から東門へは、直線的な登り道が付けられていたであろう。傾斜と滑りやすい土質から想像すれば、階段が設けられていた可能性は高い。さて、階段を上ると、途中に平場が作られ、二間×五間の掘立柱建物が正面に桁を向けて道に接していた。導入路の南側しか調査していないが、おそらく北側にも同様な建物が作られ、道を挟んで並んでいたものと思われる。建物の脇を過ぎてもう一段上ると、広場に出る。奥行き20mほどの広場の先には、正面に東門、その左右に板塀が連なる。

東門前面の広場を南に進めば、北館と南館との間を隔てる谷に行き当たる。おそらくは、そのまま土橋、後には木橋を渡って南館へ到ったものに違いない。

## (2) 中央谷の景観

南館と北館とは、当初土橋で結ばれていた。土橋の時期は遺物からは確定できないが、土橋の現存部位と第Ⅱ期石垣との位置関係から土橋が石垣に先行することはありえないこと、Gr. 6 の調査から土橋は第Ⅲ期礫石建物に先行することは明かである。したがって、土橋が第Ⅱ期に属する可能性は高いと言えよう。この推定は、土橋の暗渠の可能性を持つSX15201の年代線とも矛盾しない。その後、土橋は谷の中央部で切り崩され、木製の橋梁に変わる。また、橋梁と前後して谷底には木橋が埋められており、谷の排水機能を担ったものと思われる。

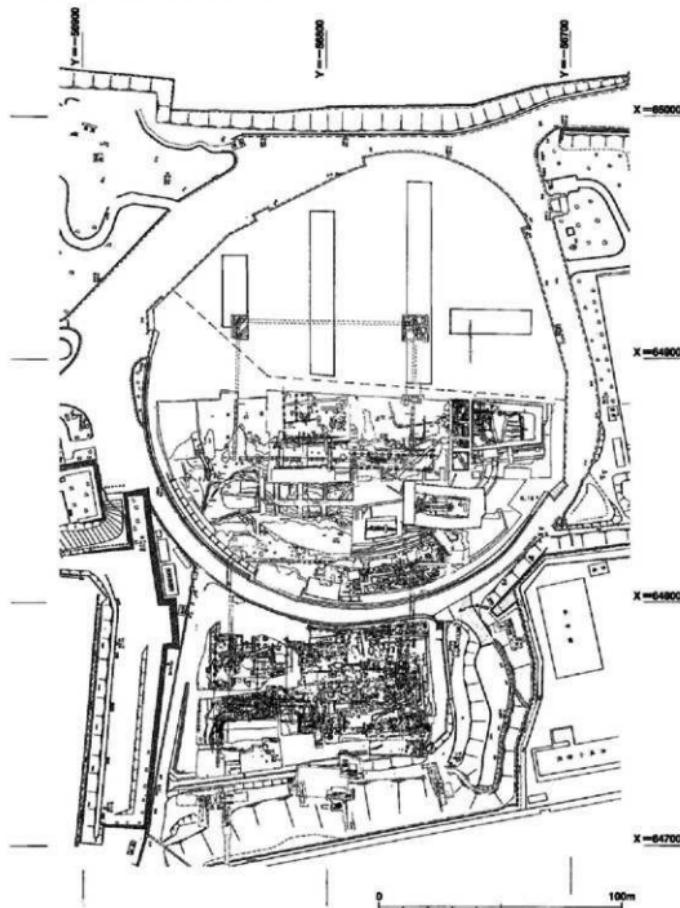


Fig.16 鴻臚館跡発掘調査全体図 (1/2000)

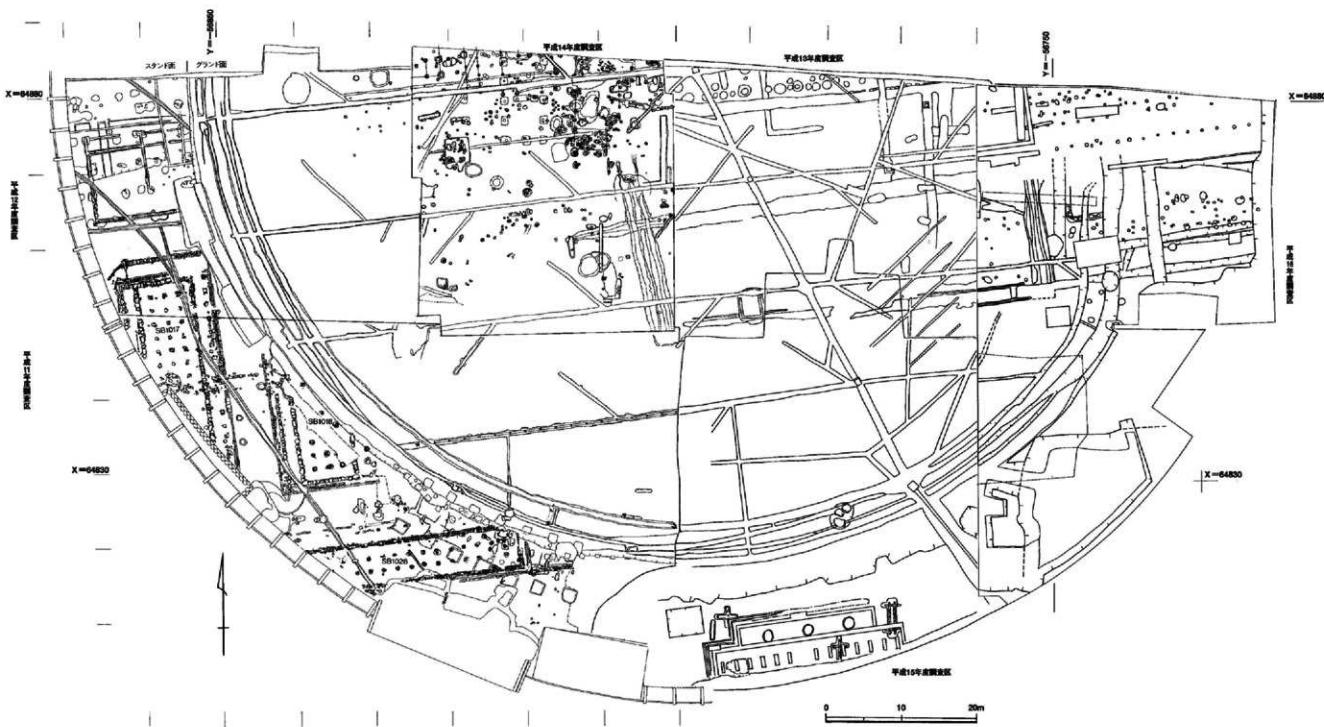


Fig.17 第17期調査区 中世～現代平面図 (1/500)



Ph20 平成16年度調査区全景 (北西より)



Fig.18 SOK16205位置図  
(正保城絵図「福岡城の地」福岡市教委1994より)

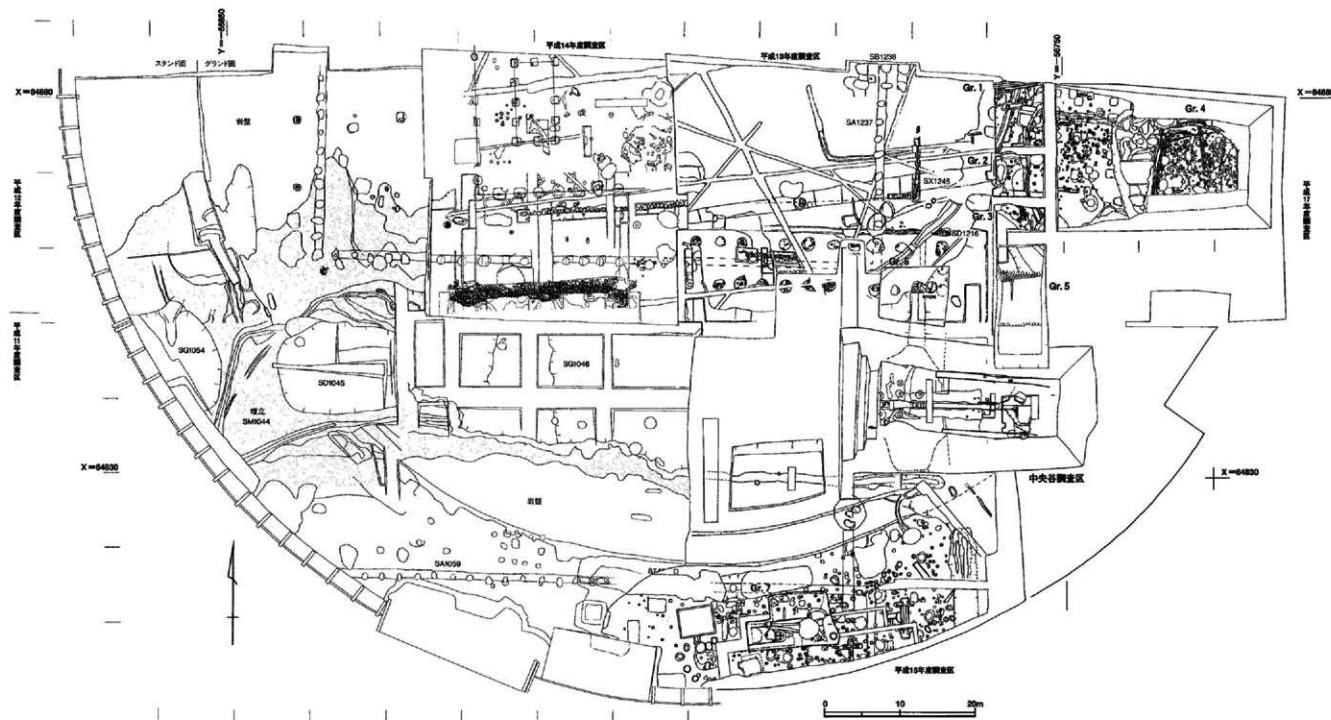


Fig.19 第IV期調査区 古代～中世平面図 (1/500)



Ph21 中央谷調査区全景（北西より）



Ph22 中央谷調査区Tr.2 (北西より)



Ph23 Gr. 6 全景 (南東より)



Ph24 平成17年度調査区Gr. 1 ~ 5 (東より)

## 報告書抄録

ふりがな	こうろかんあと
書名	鴻臚館跡
副書名	平成16・17年度発掘調査報告書
巻次	17
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第968集
編著者名	大庭康時
編集機関	福岡市教育委員会 文化財整備課
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4783
発行年月日	2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °・'・"	東経 °・'・"	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうろかんあと 鴻臚館跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 ちゅうおうじょうない 中央区域内1	40130	0192	33° 35' 12"	130° 23' 11"	2004.4.1 ～2005.3.31  2005.4.1 ～2006.3.31	2110 1520	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
鴻臚館跡	集落 官衙	古墳時代 ～現代	掘立柱建物 土 柱 穴 石 垣 溝	須恵器 土師器 石製品 貿易陶磁器 金属製品 獸骨 人骨			古代の迎賓館である 鴻臚館跡の遺構	

